

第54回日本伝統工芸近畿展

鑑査・審査講評

第54回日本伝統工芸近畿展の応募作品総243点から厳正なる第一次鑑査、第二次鑑査を経て207点が入選し、その中から審査を経て13点の受賞作品を選定しました。鑑査・審査に携わられた7名の作家・学識者の皆様からの講評を公開いたします。是非ご参考の上、入選・受賞作品をご鑑賞下さい。

【第一次鑑査】全ての応募作品を二部門に分けて入選に相応しい作品を選定する

【第二次鑑査】第一次鑑査で選定された全作品を再度検証し入選作品を決定する

【 審 査 】入選作品の中から授賞に値する作品を選定する

第一部門(陶芸・金工・木竹工)

鑑査委員 村上 隆 高岡市美術館 館長・京都美術工芸大学 名誉教授

このたび、第54回日本伝統工芸近畿展において、第一次鑑査委員(第一部門)、第二次鑑査委員・授賞選考委員を務めました。

私は、いわゆる「ものづくり」を、「ものづくり」と「モノづくり」の複合と考えることにしています。「ものづくり」は、制作工程のすべてに人の手が関与しており、手作業で仕上げる一品主義の「もの」が基本です。一見、同一に見えるものでも、細かく見ると微妙な違いを呈しているのが普通であり、仕上がりの完成度は、制作者の技量に依存します。一方、工業化における「モノづくり」によって生み出される「モノ」は、「ものづくり」と一線を画しており、機械的な大量生産が前提となります。同一型番を持つ個々の生産物としての「モノ」が一定の品質を保持し、バラツキが生じないように厳密に生産管理がなされます。「モノづくり」には、その原点としての「ものづくり」が不可欠であり、現代社会における「ものづくり」は、この双方の複合体として成立していますが、最近では「モノ」の比重が大きくなり、「もの」の存在感が小さくなってきているのではないのでしょうか。

伝統工芸は、「ものづくり」そのものです。制作された「もの」は、制作者の手の感触が作品のすべてに残されており、使い手もその感触、すなわち時空を超えて作り手の質感を追体験することができる。これが、「ものづくり」の根源的な特徴なのです。

私は、伝統工芸展の鑑査・審査に臨む際には、できるだけ「もの」である作品に触れるようにしています。陶芸の器は手で持ち上げ、金工や木工の蓋物の作品は蓋を取って中を覗きます。これは、鑑査・審査の時にしか許されない行為ですが、「もの」と「もの」との狭間に潜む「かそけき」質感の違いを五感で感じとる感性が、伝統工芸の心と信じるからです。

今年の近畿展は、例年に比べて出品数が増えたとのこと、そして、若い方の出品も増えたとのこと、こ

れはたいへん喜ばしいことだと思います。受賞作の中にもこれまでにないフレッシュな感性に満ちた作品が選ばれています。初日の第一次鑑査会場では、公正な鑑査が繰り広げられました。作品の制作意図と制作者の気持ちを読み取ろうとする鑑・審査委員の真剣な眼差しが印象的でした。二日目の第二次鑑査、それに続く授賞選考は、第一次とはまた違う緊張感がありました。中でも、重鎮の方々の近畿展のあり方と若手に対する期待、さらには伝統工芸そのものに対する思いをお聞きできたことは大変意義がありました。

伝統工芸によって生み出された「もの」としての作品が並ぶ近畿展の会場が、「モノ」が氾濫し、「モノ」がなければ生活が成り立たない現代社会において、「ものづくり」が「こころのインフラ」としての役割を担っていることを再認識できる場となることを祈念しております。

鑑査委員 小泉 優莉菜 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団 特任学芸員

日本伝統工芸近畿展第一部門の鑑査を終えて、陶芸、金工、木竹工の各部門で「ある意味では」完成された作品をじっくりと拝見できたという感想を持っております。なぜ「ある意味」と括弧を付けさせていただいたのかと申しますと、昨年の鑑査講評でも指摘されているように、静謐な光輝さを纏う作品が多かった、言い換えれば、型を破っていこうというような挑戦的な覇気を纏う作品が少なかったと感じたからです。

産業としての伝統工芸品ではなく、芸術作品としての伝統工芸技術の継承をなさっていること、また、新たな芸術の価値を創生されているのがご自身であるということに誇りと、反面、責任感を持ち創作活動を進めていただければありがたく存じます。これは、素晴らしい作品の品数が多かったからこそ出てくる、鑑査員の欲であるとも言えられるでしょう。いち伝統工芸の同人としては、新たな表現技法のさらなる高みを拝見したいという思いに駆られました。

一方で、新人奨励賞候補の方々の作品を拝見し、若手の作家の活躍が目覚ましいことに驚かされました。いわゆる「守破離」ではありませんが、伝統的な技法を習得しつつも、新たな造形表現に挑戦されている様子は、作品を通して大変伝わってきました。しかし、入選・入賞を重ねている方々の作品と並んだとき、やはりそこには三思の違いも見られました。これこそが時を重ねたワザが創造する経年美の差でもあるのでしょうか。新人奨励賞候補の方々は、ぜひ会場で他の作品と見比べることで、無形の技の習得の一端としていただければと思います。

鑑査委員 エロディ・ラルフ 文化芸術企画・マネジメント&コンサルティング

日本工芸会近畿支部が毎年開催している近畿展の陶芸、金工、木竹工の各部門の入選者と各賞への候補者を選ぶ第一次鑑査会に参加させていただき、大変名誉なことであり、喜ばしいことであった。どの作品を見ても、日本のものづくりの原動力であり、国際的な評価を高めてきた豊かさ、生き生きとした創造性、専門性の高さを改めて感じる事ができた。

長時間の作業とリサーチの成果である作品の中から選ぶなかで、技術的な熟練度と芸術的な意図のどちらを優先すべきかというジレンマを感じる場面もあった。その意味では、関西地方ならではの現代クリエイションを一望できるこの鑑査会は、新たな才能を発掘するとともに、工芸分野の進化を考える材料にもなる。

今回の鑑査に参加された、現代工芸分野を豊かにするすべての方々から感謝いたします。また、優れた作品の普及と日本の現代工芸の美しさを際立たせるために、総力を挙げて取り組んでくださった主催者の皆様にも感謝申し上げます。

第二部門(染織・漆芸・人形・諸工芸)

鑑審査委員 福永 治 京都国立近代美術館 館長

毎春恒例の「日本伝統工芸近畿展」に、観覧者ではなく鑑審査委員という立場で参加させていただいた。初めての経験となる私には、初日の「第二部門(染織・漆芸・人形・諸工芸)」の第一次鑑査、二日目の第二次鑑査、および授賞選考という役割が与えられた。普通に展覧会を楽しむのと違い、長時間をかけ作品の一つひとつに向き合うまたとない機会であり、自分の身近に、伝統を継承し現代感覚を織り込んで制作を続けている作り手を確認出来たことは、大きな収穫だった。

先ずは初日の第二部門の鑑査である。外部鑑審査委員と各部会から選ばれた作家によって染織、漆芸の順に入選作を選んでいったが、空気として、全体の底上げと裾野を広げる狙いにより、それぞれの良い所を見つけ出そうとする姿勢が伝わってきた。想像するに、さほど経験のない作家にとって、自分の作品が無形文化財保持者と共に会場に並ぶことが如何に励みになるか、そういった効果を考えればその判断は十分に納得できるもので、将来に期待した鑑査であったと言えよう。一方で、二日目の全部門を対象とする鑑査では、初日に立ち会っていなかった委員も交え、全体の入選レベルを問う試みがなされ、いくつかの作品について再度判定作業が行われた。これもまた健全なる措置で、合理的な鑑査システムであることに感心した。なお、そこで交わされた議論は今後への糧となるが多かったので、出来れば作者に伝えて欲しいと思った。

授賞審査は基本的に得票順に決定されたが、選考過程において徐々に候補作が絞られ、最終的には当該作品の受賞について、審査委員の過半数の同意を得るという手順が印象に残った。最高賞の近畿賞は「人形」部会から選ばれた。伝統の継続に加え、今に生きる我々が共感できる感覚が織り込まれた優品で、これからの伝統工芸展の在り方を象徴するもののように思った。この作品への、展覧会での反響が楽しみである。続く各賞の選考はそれぞれ順当に選ばれたが、時に私の投票とのズレを生ずることがあった。それは私が技法的な裏付けよりも作品から受け取る印象を重視して判断したためと思われるが、その意味では賞から漏れた中にも清新な息吹を感じる作品があったことを付け加えておきたい。

さて、鑑審査全体を通しての感想を申し述べると、秋の本展出品作とは違う、幾らか実験的な仕事が目につき、何か新しい風が吹いてくるように感じた。新しい試みは、成否を問わず何か心地良い気分をもたらすものである。今後もこの近畿展が新しい作り手を育て、さらに多くの伝統工芸ファンの心をつかむ場であり続けることを願っている。

鑑審査委員 山岸 一男 日本工芸会参与・重要無形文化財「沈金」保持者

昨年元日の能登半島地震では、近畿支部の皆様から御支援を賜りましたことを心から御礼申し上げます。今回、染織、漆芸、人形、諸工芸の作品を鑑査いたしました。前回より5点増とのことで何より意義深い結果だと思えます。

若手育成の観点から申しますと、発表の場を得ることの意義を知っていただき、恐れることなく挑戦してほしいと思います。日本工芸会では、本展、部会展、支部展が開催されますが、支部展だからこれで良いというのではなく、どの発表の場をも重要視することで創作意欲に変化が現れると思います。先達から受け継がれた心と技を次世代に伝えようと発表された作品に、心を動かされて出品をされる若者に期待をします。次世代を担う大切な人材です。

私は漆芸の立場で感じたことを申し上げますと、出品点数が少なく残念に思いますが、技術と造形力で材料を活かして表現された作品が目にとまりました。創作意欲と個性が表出した優品でした。漆の可能性

を求めて前進してほしいと願います。日本工芸会の次世代を担う若者の出品を期待すると共に、今、伝えるべきものは何であるかを皆様と共に問い直す時が来ていると感じた次第です。

鑑査委員 加藤 結理子 一般社団法人千總文化研究所 所長

このたび、日本伝統工芸近畿展の鑑査を初めて拝命した。色彩、造形の美しさに心を揺さぶられる作品との出会いもあり、また作品から溢れる意欲的な試みに心が洗われる一日となった。

鑑査に参加する中で、作家の高齢化によって技術の継承に腐心されているといった話を耳にした。「伝統」という名の付くすべての分野に当てはまる課題かと思われるが、ものも情報も溢れ、価値観も多様化した現代社会において、伝統工芸の素晴らしさを伝え、技術を未来へつなぐことは容易ではないように感じる。

弊所では、伝統的な染色技術における工程、材料、道具などに着目し、それぞれの技術に見られる表現の独自性を明らかにする実証的調査や、子どもたちが日本の文化やものづくりを学ぶ課外プログラムの企画開発を進めている。高度に洗練されたひとつひとつの技術の意味をできる限り可視化・言語化することで技術の継承を図ること、伝統的な技術の背景にある日本文化の本質を理解できる次世代を育成することが、弊所の使命の一つと考えている。

機械にはできない人間の手業の領域は、簡単に侵されることはないかもしれないが、人間の情報処理能力をはるかに超える人工知能が急速に発展する昨今、「人間の創造性とは何か」という視点がこれまで以上に重要となっていくだろう。日本伝統工芸近畿展が、尽きることのない人間の探究心と創造力を体現する中心的な場であり続けることを期待したい。

鑑査委員 小川 勝章 御庭植治 次期十二代

第54回日本伝統工芸近畿展、第一次鑑査。注がれた情熱は、作品の気配となって醸し出される。存在感を発し、動きが伝わる作品もあれば、厳かに佇み、静けさをまとう作品もあり。技術が輝く作品もあれば、物語を紡ぐ作品もあり。それらを前に、鑑査するに値する審美眼を宿しているか否か、鑑査委員もまた、問われている。

気になる作品があった。入落線上にあり、結果として、ぎりぎりの入選を果たした、その作品。あくまでも勝手な推察に過ぎないが、鑑査委員の先生の多くは、低評価でおられたのやもしれない。迷いなく最高点を付けていた私は、密かに、入選への喜びと責任を噛みしめた。そして改めて、その作品と自身を見つめ直した。

研ぎ澄まされた作品が結集し、ピンと張りつめた雰囲気のある鑑査会場にあって、その作品の気配は、極めて独特。ほのぼのとした、温かみが漂っていた。懸命に取り組まれたであろう制作風景が目には浮かぶかのよう。微細な隙（※表現が至りませず、お詫び申し上げます）を感じるところでさえ、そこはかとなく、人間味に溢れているかのよう。この辺りが評価の分かれ目だったのやもしれない。注がれた情熱を汲み、私は前向きな評価をさせていただいた。

日本伝統工芸近畿展。私にとって、鑑査会場で出会った多くの作品と再会できる場となる。きっと皆様の心を和ませることとなる、そう信じた、あの作品との再会。私なりに背負った責任を再認識する場ともなる。



公益社団法人

日本工芸会近畿支部

TEL.075-252-5205 <https://nihonkogeikaikinki.jp/>